

# 木曜日の男

ヒロシ

彼の位置は決まっている。

5つ並んだカウンター席の一番端。足を組み、やや首を右に傾げながら眉間に皺を寄せ、肩ほどまである長い髪を時折掻き揚げながら片手に持った本を読んでいる。彼の前に置かれたグラスにはふた口分ほどのビールが残っている。

夕方の居酒屋。お客さんは彼一人だ。

「おー、今日は寒いなあ！」

カラコロリンとドアベルが鳴り、外で一服していたマスターが戻ってきた。

彼は特に反応するでもなく本を捲る。

マスターは手を擦り合わせ「寒い寒い」と言いながらカウンター席向かえにある厨房に入った。厨房の片隅では恵利さんが手持ち無沙汰そうに立っている。

彼は眉間の皺を緩めると本から顔を上げ、息を吸いながら背中を伸ばしてグラスに残っていたビールをグイと飲みきった。

「マスター、生中もう一杯お願いします」

気をつけていないと聞き逃してしまいそうな声量で彼は言った。

「はい、ありがとうございます」

マスターの声と同時に恵利さんが反応し、彼から空いたグラスを受け取る。

「ありがとうございます」

と彼は軽く頭を下げた。

やがて黄金比で注がれた生ビールを恵利さんが持ってくる。

「ありがとうございます」

彼は礼を言いながら、手にしていた本に素早く葉を挟みカウンターに置いて、両手でグラスを受け取った。冷えたビールを一口飲んでグラスを置くと、本の世界から現実に戻ったのを確かめるように深く呼吸をした。

「マスター、今日のおすすめはなんですか？」

先ほどとは別人のような明るい声で彼は言った。

今日はとても静かな出だしだ。

寂れた田舎に昨年オープンしたこの居酒屋「笹屋」。定休日の次の日である木曜日、夕方6時をまわるころ決まって彼が現れる。

「ただいま戻りましたあ」

と言って店内に入ってくるのだが、無論ここは彼の家ではない。マスターは「おかえりなさい、いらっしゃいませー！」と返答をする。

「退屈な日常から戻れるのはここだけですからね」

と彼は以前言っていた。

この店には従業員はいない。マスターとマスターの奥さんである恵利さん、2人で経営している。笹屋に来るお客さんは大半がこの界隈の人たちで、今唯一店内にいる客である彼も同じ地域に

住んでいる。

その彼の名であるが、今ここで敢えていう必要はないだろう。いずれ解ることになると思う。本と酒を愛する彼は「この融合こそが我を彩る唯一のイベントよ」と口々にしている。

先ほどまで彼が読んでいた本は「レ・ミゼラブル」であったが、今は違う本を手をしている。彼のバッグには常に本が2冊以上入っているのだ。

「ん、さっきまでの本とは違うんですね」

早速気づいたマスターが声をかける。

「あ、はい。ちょっと詩に浸りたくなりまして」

彼がマスターに掲げた表紙には「サラダ記念日」というタイトルが記されていた。

「俵万智ですか。懐かしいですね」

マスターはキャベツを刻みながら言った。

「国語の教科書によく載ってたね」

恵利さんが言う。

「なんでしたっけ？あの詩」

包丁を握っている手を止めてマスターは空を見た。

「この味がいいねと君がいったから7月6日はサラダ記念日」

彼は諳んじた。

「あー、それですそれです」

マスターは頷きながら再びキャベツをザクザクと切る。

「週が良いなと僕は思ったから毎週木曜は笹屋記念日」

彼は本に目を落としながら、あたかもそういった詩が書いてあるかのように言った。

「ははは、ありがとうございます」

マスターは切り終えたキャベツをボウルに移した。

「俺が詩集を出した際は是非ここに置かせてください」

「もちろんですよ」

マスターはとびっきりの笑顔を浮かべた時、ドアベルと共に入り口が開いた。マスターが反応する。

「いらっしゃいませー！」

「こんばんわあ！っと、やっぱりいたね」

「おいっす」

入ってきたのは彼と幼馴染の男、香川哲也だった。

迷いなく彼の隣に哲也が座り生ビールを注文する。

「最近忙しいみたいなんじゃない？」

「うーん、まあ。読書に忙しいね」

「ははは、相変わらず読んでるね。お、今日は詩集か？」

哲也は彼の本を覗きこんだ。

「うん。俵万智。そっちはどうよ？」

「ダメだね、この時期は。年が明けてから新年会関係のやつが数件あっただけで今は暇」

哲也は旅行代理店に勤務している。

「そうかあ。スキーツアーとかやればいいじゃん」

「いやあ、老人が多いからねえ」

「じゃあ却下だな」

「うん。怪我されるから」

「はい、おまちどうさまです」

恵利さんが哲也に生ビールを渡す。

「じゃ、お疲れ様でした」

彼は哲也が掲げたグラスに自分のグラスを合わせカチンと音を奏でた。

「例のやつ、どうなった？今日気になって来てみたんだけど」

「ん？例の？」

彼はポカンとした

「ほら、笹屋テーマ曲」

「あー！！うんうん、進んでるよ！」

「え、あの、なんですか？テーマ曲？」

マスターが如何にも「What?」という顔をして話に入った。

「この前哲ちゃんと飲んだ時、笹屋のテーマ曲作ろうって話になりましてね」

反応に戸惑うマスターを尻目に彼はポケットからスマートフォンを取り出し弄りだした。

「一応出来てるんだ、聴く？」

「おー、今聴けるの？」

「うん、ライブラリに入れてきた」

「どれどれ」

彼はスマートフォンをササッと弄りカウンターに置いた。

「イツ・ショータイム！」

ダッタッタタラダッタッタラ♪

彼のスマートフォンからイントロが流れ出す。

「ちょっと、待て！」

哲也が手で制した。

「このイントロあれだろ！ダンゴのやつじゃないか！」

彼は哲也を無視してビールを飲んだ。イントロは流れ続ける。

「あー、懐かしいですねえ。三兄弟のやつですね」

マスターは手を休めて聴いている。彼は「まあ聴いてろ」と言わんばかりに正面を向いて再

びビールを飲む。単調でありながらも頭に刷り込まれるイントロが終わりメロディが入った。

仕事終わって笹屋♪（ささやっ）

定時上がりで笹屋♪（ささやっ）

大枚叩いて笹屋♪（ささやっ）

花の木曜日！

笹屋！笹屋！笹屋！笹屋！

花の木曜日！♪

「どう？」

「どう？ってこれ笹屋の曲じゃなくてお前の曲だろ」

哲也の言葉に彼はニヤリと笑う。

「いやあ、良いですねえ」

哲也とは裏腹にマスターは気に入っている様子だ。いつの間にかマスターの隣にいた恵利さんも頷いている。

「これ木曜日限定じゃん」

哲也が指摘する。

「だから、日曜日から土曜日まで作ればいいじゃん」

彼は言った。

「全部で7番？長くね？」

「曜日の部分を別々に作ってさ、一時間おきに店で流すってのいいんじゃない？」

「あーなるほど」

哲也は頷いた。

「それ良いかもね！」

恵利さんが閃いた表情をしながら言う。

「マスター、どうですか？」

マスターはというと、虚空を見つめていた。なにかイメージをしているようだ。

やがて、

「それ、スピーカーから流したりできます？」

と切り出した。

「はい、決定。木曜はこれでいこう」

彼は親指を立てる。古臭い仕草だ。

「はははは」

客が2人しかいない店内だが笑い声で賑やかになった。

「でもそれってスマートフォンみたいなのではないと再生できないんですよ？」

マスターは不安気な表情をした。

「大丈夫ですよ。俺、今使っていないプレイヤーありますし、それ繋げば流せます」

彼はスマートフォンをポケットにしまいながら言った。

「スピーカーも使っていないやつあるので、それ使っているですよ。来週持ってきますので」

「じゃあ来週の木曜からこれでいこう。全部作ってきてね」

「え、木曜『から』？来週まで7バージョン作るの？」

「水曜は休みだから6バージョンだ」

彼は哲也に肩をポンと叩かれた。

「同じようなもんだろ。ま、いっか」

彼は頭を掻いた。

「マスター、日本酒熱燗でください」

「はい、ありがとうございます！」

数分後、徳利が差し出される。

「じゃあ、『この曲が良いねと君が言ったから毎週木曜は笹屋記念日』で。乾杯。」

彼らの木曜日はまだ始まったばかりである。